

産婦人科医が担うべき産道裂傷の 包括的ケア—女性の QOL を守るために

企画者のことば

遠藤誠之

分娩における産道裂傷は、産婦人科医が最も頻繁に直面する合併症の 1 つでありながら、その診断や修復の重要性が見過ごされがちな領域でもあります。軽度の会陰裂傷から深い肛門・直腸への損傷、さらには頸管や子宮本体への損傷まで、その病態は多岐にわたりますが、不適切な処置が後年にわたり女性の生活の質(QOL)に深刻な影響を与えることは、まだ十分に共有されていません。

近年、出産年齢の高齢化、分娩様式の多様化、無痛分娩の普及など、分娩を取り巻く環境が変化するなかで、裂傷の様相も変わりつつあります。特に、裂傷をただ“縫合する”のではなく、骨盤底の構造を理解しながら“機能を回復させる”視点が重要になってきています。そのためには、解剖学的な知識や縫合手技だけでなく、術後の疼痛管理、排尿・排便機能の評価、さらには性機能への配慮まで、多角的なアプローチが求められます。

本特集では、第一線で活躍するエキスパートにより、産道裂傷の評価と修復の基本から、産科的肛門括約筋損傷や直腸腔瘻、骨盤臓器脱など複雑な合併症への対応までを網羅的に紹介します。また、産道裂傷を起こさせない工夫、さらには産道裂傷が女性の健康に与える影響、骨盤底リハビリ、多職種連携の重要性にも焦点をあて、産後長年にわたって女性の健康を支える視点を提示します。

日常診療に追われるなかで、産道裂傷の「その後」に思いを馳せる機会は限られるかもしれません。しかし、産道裂傷を治療するあなたのその「ひと針」が、その女性の将来の生活に影響を与えることを再認識し、日々の診療を見直す契機となれば、本特集の企画者としてこれ以上の喜びはありません。